

氏 名(本 籍)	林 龍 平 (青 森 県)
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,253 号
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	日本語の単語認知における表記差効果
主 査	筑波大学教授 教育学博士 福 沢 周 亮
副 査	筑波大学教授 教育学博士 太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授 教育学博士 海 保 博 之
副 査	筑波大学助教授 塚 田 泰 彦

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 本論文の目的

本論文の目的は、日本語における単語の認知過程に見られる表記差効果を規定するものは何かということを実験的に明らかにすることにある。具体的には次の通りである。①意味処理差仮説を提出する。②表記差効果の生起機序に関して同時干渉課題により検討する。③表記差効果の生起において同音異義語が果たす役割について検討する。④表記差効果の生起機序に関して発達的に検討する。

2. 本論文の構成と概要

本論文は、5 章、本文282 頁、引用文献14頁、図表107葉より成っている。

第 1 章 序論

第 2 章 表記差効果の生起機序に関する同時干渉課題に基づく検討

第 3 章 表記差効果の生起に同音異義語が果たす役割の検討

第 4 章 表記差効果の生起機序に関する発達の検討

第 5 章 本研究の総括と今後の展望

第 1 章では、先行研究の検討が行われた。その結果、視覚的単語認知における表記差効果を説明するために、知覚的処理差仮説と音韻符号媒介仮説の二つの考え方が明らかにされ、同時に、これらがいずれも、表記差効果の生起機序を十分に説明できないことが指摘されて、新たに意味処理差仮説が提出された。すなわち、漢字表記語と仮名表記語の認知過程の違いは、語彙アクセス後の両者の意味処理過程における機能の違いにあるのではないかと考えられた。以下では17の実験により、この仮説の妥当性の検討が行われたのであるが、発達の検討が行われた実験16、実験17を除いて、被験者はいずれも大学生であった。

第 2 章では、実験 1～7 が取り上げられた。実験 1 では構音抑制課題により音韻符号媒介仮説と意味処理差仮説の比較検討が行われた結果、前者よりも後者を支持することが明らかにされた。実験 2、実験 3 ではストループ色一語干渉課題により知覚的処理差仮説と意味処理差仮説の比較検討が行われ、実験 4、実験 5 では絵画型ストループ課題により知覚的処理差仮説と意味処理差仮説の比較検討が行われた結果、意味処理差仮説からの予想と一致することが明らかにされた。実験 6、実験 7 では実験 4、実験 5 と同じ刺激事態で、妨害刺激とターゲット刺激の役割を入れ替えて、音韻符号媒介仮説と意味処理差仮説の比較検討が行われた結果、後者からの予想に

のみ一致することが明らかにされた。

第3章では、実験8～15が取り上げられ、漢字表記語および同音異義語の有無を操作した2種類のかな表記語により、主として意味判断を課する実験事態での検討が行われた。実験8では、意味文脈の有無に関わらず、かな表記一義語と漢字表記語との間には意味判断時間に差がなく、かな表記多義語と漢字表記語との間に見られた差は事前の意味文脈の提示で無くなることが明らかにされ、意味処理差仮説を支持することが明らかにされた。実験10、実験11では、意味判断課題としてカテゴリー成員課題が用いられた結果、実験8、実験9における疑義が解消され、同じくカテゴリー成員課題を用いて構音抑制事態で3種の表記差効果を検討した実験12では、いずれの表記語の意味判断も構音抑制課題によって妨害を受けることがなく、結果として意味処理過程に違いがあるとする意味処理差仮説を支持することが明らかにされた。実験13、実験14、実験15では、ローマ字表記綴りを使うことの有効性が検討され、音韻的プライミングおよびマスキング課題により3種の表記条件間での音韻的符号化の位置づけについて検討が行われた。その結果、音韻的プライミング事態でも音韻的マスキング事態でも意味処理差仮説を支持することが明らかにされた。

第4章では、実験16、実験17が取り上げられた。意味処理差仮説の妥当性がストループ課題を用いて発達的に検討されたのであるが、表記差効果のパターンが年齢によって異なることが明らかにされ、各表記語の意味処理に果たす役割の重みが年齢で異なることを予想する意味処理差仮説に一致することが明らかにされた。

第5章では、以上の実験結果から、漢字表記語とかな表記語の語彙処理過程の違いは語彙アクセス過程そのものではなく、語彙アクセス後の意味情報や音韻情報の特定のしやすさにあり、これが種々の単語認知課題における表記差効果を生起させる背後にあると結論され、更に残された課題についての議論が行われた。

3. 本論文の成果

本論文の目的は、漢字表記語とかな表記語の認知過程の違いは語彙アクセス後の両者の意味処理過程における機能の違いにあるのではないかとする仮説（意味処理差仮説）を提出し、実験的に検討することであるが、17の実験を通して、その仮説が支持されることが明らかにされた。

個々には以下の通りである。構音抑制課題およびストループ干渉課題という2種の同時干渉課題によって、3つの仮説について比較検討が行われたが、実験1～7により意味処理差仮説からの予想と一致することが明らかにされた。

更に同音異義語を中心として、実験8～15によって「先行文脈の有無と範疇化課題」「語彙決定課題」「カテゴリー成員課題」「音韻的プライミングおよびマスキング課題」により行われた表記差効果の検討でも、意味処理差仮説が支持されることが明らかにされた。

また、実験16、実験17による発達的な観点からの検討においても、ストループ課題を用いて行ったところ意味処理差仮説が支持されることが明らかにされた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本語における視覚的単語認知の研究で、漢字表記語とかな表記語の表記差の違いがもたらす効果について、その生起機序を実験的に検討した研究である。先行研究の詳細な検討を通して意味処理差仮説を提出し、17の実験により丹念に仮説の検討を行って仮説を支持する結果を得たもので、この領域に新しい知見を加えたといえる。

ただ、一方では、実験にしても議論にしても大変微視的であるため、拡大した議論を展開することには慎重でなければならないと認められる。特に、この結果を教育面に発展させることにはかなり無理が認められることは否定できない。

しかし、発達的な検討を行った2実験を除いて被験者を大学生で統一し、条件を厳密に設定して上記の成果を

あげたことは、日本語の視覚的単語認知の研究を一步進めたといえるのであって大きな意義が認められる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。